

船だ。元気な声が爆破した。思えば長い長い抑留に終
止符をうった。舞鶴に上陸して八月二十六日家路につ
いた。

いまだ凍土に眠る抑留犠牲者の遺骨収集もはかどら
ず、その数万とも六万とも聞いているが、早急に遺
骨収集の処置が要求されると思う。

【執筆者の紹介】

生年月日 昭和二年八月二十五日

学歴 昭和十七年国民学校卒業

満州開拓義勇軍内原訓練所修練

入隊前の職業 満州開拓義勇隊として満州開拓

入隊 昭和二十年八月十四日

抑留地 スターリンスク第七收容所

復員 昭和二十三年八月十六日

復員後の職業 農業

(岩手県 田辺 壮久)

シベリア強制抑留記 歳月の残像

福島県 太田 俊一

ソ連(ロシア)領に入る

昭和二十年十月下旬、北満の孫吳から瑗瑗、黒河、
さらにその北を流れる黒龍江を船で渡り(この直後、
結氷)上陸、そこはブラゴエシチェンスク(旧ソ連
領)であった。町の様子が今までいた満州とは一変し
て、建物をはじめ往き交う人々の顔形からすべてが異
国情緒にあふれ、しばしの間見とれていた。

と、急に周囲が騒がしくなった。どこからともなく
ソ連兵が数人、いや、その何倍か知らぬ大勢のソ連兵
が自動小銃を構え、たちまちのうちに我々を囲んで何
やら叫んでいる。「ダワイ」「ダワイ」「チャースイ・
ナーダ・エース」、左手を前に出し右指でその手首を
指しながら、何と腕時計をよこせと言っている。また
「カレンダース・エース・ダワイ」と。これは、万年

筆かエンピツなど筆記具が欲しいと言う。

今さら逃げることはもちろん、抵抗することもならず、そうかといってヤツらの言うことを聞くのもシャクにさわる。そこで班長に相談し、班長は上司に、上司からソ連の司令官に交渉した。そこで案が出た。

「フレーブと交換させよう……」「フレーブ?」、何のことはない、ヤツらが常食としている「黒パン」とわかり、早速交渉した。初めて手にする黒パン、話には聞いていたが、形、大きさは赤レンガを連想させるような代物。その味は、何とも舌ざわりが悪く、見るとワラクズなどが入っている。それに、いやに酸っぱい。変質したのかと思われるほど、とても食べられたものではなかった。

シベリア鉄道に揺られて

ここで三日ほど暮舎生活を続け、周辺を整理して。帰国という希望があるので、それなりに心は弾んでいた。

「出発準備!」の声がかかった。「それっ」とばかりに駅に急ぐ。側線には長い貨物列車が停まってい

る。やがて「乗車」の命令で行動した。中はドアを中心に左右に二段の棚をつくり、一貨車が四十人ほどの定員になっていた。三十両なら一、二〇〇は数えられる。

間もなく発車、ゴトンと貨車は動いた。二、三時間はそんなにスピード感はなかったが、昼食を過ぎたころから加速してきたことを体で感じた。というのは、貨車なので四十センチ×五十センチほどで、径一センチの鉄棒十本ほどはめ込んだ窓が四隅の上部に付いている。ドアは閉め切つてあるので外の様子は見る事ができない。

このスピード感からすると、これまで支線を走っていたのだが、ここからシベリア本線に入ったことが察せられた。その分岐点はクイブシェフカという町。ここから右折して東に向かえば、その先はハバロフスクを経由してナホトカ港へ通じている。帰国できる楽しみに胸を弾ませながら、故郷の話に花を咲かせて車内はにぎわっていた。そのにぎわいも知らぬげに貨車は無心にひたすら走り続けた。ある所では一時間ほど停

車したかと思うと、場所によっては一昼夜も動かないこともある。何とも気まぐれな貨車にただ驚くばかりであった。

果てしない鉄路

停車している間に、折を見ては各車両に伝令が飛ぶ。食事の材料や調味料を配給するという連絡である。聞くより早く、前もって決めてある当番が、食缶や麻袋、風呂敷や紐などを持って糧秣車両を日指して駆けつける。また一方の当番は、樽や空缶を持って水汲みに。残った者はそれぞれの場所に燃料を集め、かまどを造り、これで準備はできた。調理されたものを手際よく火にかけ、たちまちのうちに炊き上がるや「食事に集合」の声とともに、箸を取ったかと思う間もなく食事終了となる。これらの動作は、公主嶺（満州国）で武装解除され貨車輸送以来一カ月余りも繰り返してきたことなので、その要領は身について実に鮮やかなものであった。

貨車は無心に広野を走った。

帰国の夢は消えて

「スコーラ・ダモイ」、上司を通して輸送指揮官に聞かされた返事は同じ。それも二日か三日ならわからなくてもいい。これだけのスピード（時速六十キロ）で走ればそろそろ日本海が見えるころなのに、それらしい気配がない。

「海が見えたぞ。あれが日本海だ……」、ある朝、突然の叫び声に皆の顔は一斉にその方へ。明かり取りの小窓を眺めていた山本上等兵が指さしていた。見ると確かに青々とした水が、大波小波打ち寄せては白く砕け散る波頭。「ああ日本海だ、あの向こうに日本がある」「船が待っている、オレたちを……」「オレたちは帰れるんだ。バンザイ……」、早くも指を折り日数を数えている者もいる。貨車はただひたすら走った。

やがて夕方、陽が傾き始めた。日本海と思われる水面がその光を映して美しい。それは夕日が水面の彼方に沈むことになる。ということは「変だぞ……」、それまで「ダモイだ」、「帰れる」とばかりにぎわっていた車内が静かになった。

「おい皆、あの夕日を見ろ！」、それまで腕組みをしていた松川班長が立った。「朝日が日本海に映えるが……夕日が……。たしかチタとかいう駅に停車したのは昨日の昼ごろだったかな、昼食を食べたところだ。あれからこのスピードで何キロ走ったか知らないが……これはヒョッとすると、今見えるのはバイカル湖かもしれないぞ」「オレたちは時計も地図も、もちろん磁石など全部取り上げられて手元がないので確かなことは言えないが……」。とすると、この貨車は東に向かって走っているものと信じていたのに、それを裏切るかのように西に向かっていたのであった。

捕虜収容所

シベリア鉄道を貨車に揺られながら十数日、名も知らない駅に停車し、直ちに貨車を降りた。聞けばイルクーツクという街。見渡す限り白一色。行き先も知らされずに、命じられたまま雪道を音もなかった黙々と一時間も歩いたかと思われるころ、「ストイ（止まれ）」の号令。そこは小高い丘の上、前方五百メートルほどの所に山小屋を思わせるような建物が見えた。

それにしては屋根が低い。軒先が地面に届くほどである。その周りには有刺鉄線が二メートルほどの高さに三段から五段に張ってあり、四方の隅々には十メートルを超す高さに展望哨（見張り所）が建っている。ここがこれから私たち一、二〇〇人が共同生活するラーゲル（収容所）だと言う。

ここをイルクーツク第五収容所と称した。中に入っ
て驚いた。出入り口や窓が二重になっているのは満州でも同じなのでわかるが、入り口から三段ほど下がって、約二メートル先にまた三段下がって通路（土間）になっていた。つまり半地下式構造になっていたのである。外から見れば屋根が地面すれすれであったが、これは防寒のためであった。建物の幅は約六メートル、高さが低いところで三メートル、高いところ（棟木）で五メートル、奥行は、その大小にもよるが約三十メートルほど。それが五棟から十棟は建っている。中は、通路を挟んで両側に五十センチほどの高さに丸太や角材で仕切り、板敷で、そこに毛布を広げ日常寝起きした。それが二段になっているので、うっかり立

ち上がったり背伸びをすれば、頭をイヤツというほどこづかれ目から火花が出ることになる。通路には三カ所ほどにドラム缶を大きくしたような「ペチカ」と呼ぶ暖房器具が置いてあり、松割木がほどよく燃えているので、寒さは余り感じなかった。

シベリアの寒さ身にしむ

寒さは早くも零下三十度と聞こえた、昭和二十年十一月中旬というのに。満州国・奉天（現・瀋陽）市の部隊勤務のころも時には零下三十度ほどを経験していたが、その時よりは一層寒さが身にしみた。それは環境の相違ばかりではない。敗戦によって強制的に抑留されたという精神面の影響も多分にあった。

生活上の注意事項や各自の場所割りなど、身辺の整理を済ませ、シベリアの第一夜は静かに更けていった。

「アーノカ・ダワイ・ストロイカ！（建築作業班集合）」、チャッサボーイ（引率兵）の叫ぶ声に、朝食もそこそこに、眠り足りない目をこすりながら宿舎前に整列した。

朝七時、外はまだ暗く、吐く息が白くなる。昨日着いたばかりなのに、一夜明けて早速作業である。「まだ一時間も早いじゃないか」、文句を言ったところで言葉は通じない。「そんなことワシヤ知らん」とばかり、歩哨の指示で五列縦隊に並び直して人員点呼を受けた。今までの習慣で四列縦隊に並んだところ、歩哨は懸命に指折り数えるが、途中で分からなくなる。

「ボチモターク・ニエハラショウ」、五列に並べと云う。この一事でロシア人の教養の程度が知れた。ロシア人恐れるに足らずと気を強くした。

作業を前に幾つかの道具が渡された。その道具はというとお粗末そのもの。

タポール 斧。柄の長さ約五十センチ、重さ三
〜五キロほど、刃渡り約二十センチ。

ラパート スコップ。柄の長さ約一・五メートル、直径五〜六センチ、刃先は日本製
より一回り小さく、腰が弱い。

ピラー 鋸。刃渡り約八十センチ、幅約二十
センチ、両端は十センチ、形は弓状に湾

曲している。それを向かい合って使う二人挽きである。

これらの道具を使って仕事をしろと言う。木造二階建てほどの家なら、否、そうでなくとも日本では鑿・鉋・錐や曲尺・墨壺などを使うのだが、このような道具ではどうにも使いにくく、仕事にならない。というのは、理由を挙げれば幾つかあるが、何と云っても体型と道具の角度がピッタリしなかった。それに民族性というのか、鋸にしても二人挽きで、「ノコビキ」と言われているように挽き切る物という先入観があるのでそのつもりで扱おうとどうしても具合が悪い。話には聞いていたが、欧米諸国のノコは押し切るようになっている。それが向かい合って二人三脚ならぬ二人挽きなので、双方の呼吸が合わないことにはどうにも仕事にならず、これには困った。でも、そんな泣き言は聞いてくれるわけがなく、「ダワイ！」の声に尻をつっつかれながら、いつとはなしに使いに慣れてきた。

捕虜はこまねズミのように

一日の作業が終わり宿舎に帰る。と、そこに待って

いるのが「使役」と称する作業外の雑役であった。舎内外の清掃を初め、薪割り（炊事用の赤松 直径二十〜三十センチ、長さ四十センチほど。暖房用の白樺 右に同じ）、水汲み。場所にもよるが、これがまた一苦勞であった。何と云っても水がなくては一口も生活は成り立たない。ましてや数百人の集団ともなれば、炊事・掃除・洗濯・洗面その他使用量は計り知れない。大きな町、といっても人口はわからないが、「ワダカシカ」と称して水汲み場が何か所があった。ワダボチカという木製の樽（ドラム缶よりやや大きい）を車（冬は橇）に乗せて指定の場所に行く。管理人に話を通し、バルブの栓を開け給水、満水になって止める。何のことはない、街角のガソリンスタンドで車に給油するのと変わりはない。

このように町の中では苦勞がないが、同じ水汲みでも、山の中や人家のないところとなると一苦勞であった。というのは、地下水を探すことになるからである。それも五月から八月まではよいが、九月ともなる

と朝夕の冷え込みが身にしみるようになる。十月にな

れば早くも氷が張る。シベリアにとっては避けることのできない厳しい自然の掟、冬將軍の襲来である。

前にも記したように、満州にいるころも気温マイナス三十度ほどまでは経験しているが、シベリアともなれば話は別だ。水気のあるものすべてが凍りついてしまう。水汲み使役も場合によっては命がけであった。

「働かざる者食うべからず」

来る日も来る日も仕事に追われ、何の楽しみもない生活。日に三度の食事がせめてもの楽しみであるはずなのに、これもまた苦勞のタネと言ったら、ナゼ、どうして、と思われるだろうが……。食事は黒パン三十五グラム。その大きさは、ポケットティッシュペーパー二個分ほど。じゃが芋やキャベツ、豆類などお粗末なもの。それを各自の飯盒とその蓋に当番が盛るのだが、二、三十人の目が一齐に当番の手に集中する。少しでも差がつけば大騒ぎとなる。どう見ても周りの物より自分の物が少なく見えるから不思議、意地になつて当番に文句をつける。当番も黙ってはいない。

「何を、文句があんのかよ！」と袖をまくり、拳を振

り上げる、周りの者たちが慌てて中に入る。一方、「やれやれ、やっちゃまえ！」と、あたり立てるものもある。何とも殺伐としたこの場の空気は異様そのものであった。

このような騒ぎを知ってかどうかわからないが、ある時、現場監督から通訳に連絡が来た。「作業はすべてノルマによって査定するので、一〇〇%を基準として、それ以上の者と以下の者を食事の量をもって評価するので皆に伝えるように……。」と。だからといって、トータルにおいては支給される量に変わりがない。ということとは、一〇〇%以上働いた者は、一〇〇%に達しなかったために減食された者の分を受けることになる。これではまさに「弱肉強食」以外の何ものでもない。

「働かざる者食うべからず」とは、スターリン憲法、基本の一つと聞くが、昆虫の世界には、その生活習性にもよるが仲間を食べてまで生き延びようとする本能があるそうだが、これを「共食い」と称している。人間も強制抑留というドン底の生活になるとまさ

に昆虫と何ら変わらない生き方で、浅ましい限りであった。強い者はその腕や体力に物を言わせて腹を肥やし、弱い者は何の抵抗もできずにいつも空腹を抱えては指をくわえている。だが、このような不合理なことが長く続くはずはない。そのツケがどのような形で現れるか、後日思い知らされることになった。

貧しい地元民の生活

シベリアに生活して感心したことが幾つかある。

その一つは、地元住民の彼らは人種差別をしない。中国（中共）人や朝鮮（韓国）人を初め、欧米や肌色の異なる人を見ると陰口をきく悪い癖が日本人には見られるが、シベリア住民にはそのようなことはなかった。

例えば、町を歩行中、思わぬところで呼ばれる。

「ヤボンスキー・ドラスチャー（日本人よおはよう）」、さらに「イジェスター（こちらに来て）」、と招かれ、手招きされた所に行くと「ドラワーピリ・ナーダ（薪割りしてほしい）」、と言う。指示されるままに、時間にして約一時間ほど、小割りにした薪を軒下に積み上

げ、後片づけを済ますと「スバシーボ・ハラシヨウ」と、ご苦労さま、よくできたわとばかり笑顔を見せながら、マダムはエプロンのポケットから無造作に五ルーブルから時には十ルーブル紙幣を渡してくれた。

「サジース」、テーブルを指して休めと言ひ、間もなくコーヒーや何らかのおやつらしい物を出して食べろと言う。こちらは敗戦国の抑留されている者にもかかわらずである。それでいて、彼ら地元民の生活はというと、そんなに恵まれているとも思えない。戦勝国であるのに、衣類に寝具、それに食器などの台所用品、農機具類、そのいずれも最低限の数量。例えば何かの都合で家族以外の幾人かが集まる時は、食器類を持参するか借り集めることになる。食べ物も同様で、そんなに豊富に食べているわけではない。それこそ粗末そのもの。抑留されている我々と大差はない。ここに共產（社会）主義国家の実態が知らされる。ただ、ロシアとなった現在は別として。

次に感心させられたのは、シベリアと言えば地球上最大の面積を持ち、世界有数の森林地帯。そこで伐採

作業をする。寒冷地なので焚き火をする。また彼らは好んでタバコを吸う。時には北国特有の強風が吹く。それでいて三年余りの間、火事騒ぎはなかった。このような環境であれば、日本なら火事騒ぎがあつて不思議はないのと思ひながら彼らの動作を見ると、例えばタバコを吸い終り捨てるとき、必ず口元に寄せ唾液をかけ火を消して捨て、足で踏みつぶす。また焚き火は、水があればかけて消す、水のない時は土をかける。彼らはそれなりに火災に対しては注意している。これも過去に幾度か大火災を経験したための生活の知恵だろう。

戦友シベリアに散る

理由もなくシベリアに強制抑留されたその数は六十万万人。そのうち空しくかの地で病氣やケガなどで死亡した者は約六万人と言うから、一割の者が遠く故郷を思ひながら没したことになる。同じ作業班内からは一冬に十数人の戦友が亡くなっている。その一つの例を記しておく。

一日の作業も終わり、わずかな夕食に何とか空腹も

おさまったころ、他に楽しみもないので枕を並べ、郷里の昔話など交わしながら眠り、朝、目が覚めて起こそうと手に触れると冷たくなっていたことがあつた。また、ある時は「おい、Sのヤツ、様子が変だぞ」、見ると、三日ほど前から気分が悪いと言って休んでいたSが、夜は静かに眠つたのに、間もなく夜明けという時間に目はうつろとなり、どこを見ているのか目玉は動かない。両手を宙に浮かせて犬かきのように動かす。呼んでも返事がない。呼吸はかすかに、時々大きく肩が波打つようになる。このような症状が表れたらもうそれまで。そのほとんどは間もなく「臨終」となる。前日まで苦勞を共にしてきたことを思えば、胸を締めつけられるばかり。涙も出なかつた。

犠牲者が出るのは冬季節が多い。「冬將軍」と呼ばれるだけに、これまでも記したが、その寒さの前に立ち向かえるものではない。犠牲者が出れば、粗末なものではあるが形ばかりの祭壇をつくり、水と黒パンの一片も供え、灯油をともし、親しかつた者何人かで手を合わせ心から冥福を祈つた。軍医に診てもらえるの

はよい方で、軍医に診られることもなく息を引き取るほど哀れなことはない。また収容所には僧侶もいないが、中には経本を持ったじという召集兵がいた。「お経は難しくて読めない」と言うので、その経本を預かっておいて、いつも私が、これも形ばかりの僧侶を務めていた。

寒中、井戸に転落

伐採作業で、倒れてきた木を避けようとして、散乱している枝葉に足をとられ転んだところに木が倒れ、足を挟まれて十日間ほど休んだ。そのケガもよくない、収容所内の軽作業をすることになった。何のことはない、雑役である。ある日、当番になったので水汲みに出かけた。百メートル余り離れたところに地下水が湧き出ている。そこは足場がよくないので足に故障のある者は行かないことになっていた。今、足場がよくないと言ったが、冬季ともなれば水を初め水分のあるものはすべて凍結するのがシベリアの掟である。こればかりは何びとといえども手に負えるものでない。

水汲み場は、バケツにロープを結び、直径一・五メ

ートルほどの穴に放り投げ、ロープを手繰りながら汲み上げる、何とも原始的な方法であった。このような作業を繰り返すので井戸の周囲はツルツルとなり、足元が危険となる。その日も注意をしながら間もなく終わろうとした時「アッ」、思わず上げた叫び声。ドボン、私の体は水中深く沈んだ。咄嗟に両手を広げ上下に動かす。と目の前が明るくなったので、そのまま両手を左右に。この姿勢のところに数人の仲間がロープを輪にして投げた。それが脇の下に掛かり引き揚げられて助かった。ここまではよかったが、後が大変。うっかりしていると一人、氷の天ぶらになってしまふ。だからといって衣類を脱ぐこともならない。

何人かの肩に担がれ収容所に急いだ。とにかく医務室へ。衣類を脱ぎ、ベッドに寝かされ、全身マッサージ、医師の指示で暖房を止めた。室内の気温は下がってくる。後で知ったことだが、凍傷患者の治療に暖房は禁物。寒いだらうと暖めたりお湯に入れたら、火傷のように症状が悪化する。「凍傷は雪でマッサージ」が原則だそうだ。

和を以って貴しとなす

子供の争いは成長・発展があるが、大人の争いは、小は夫婦、親子、兄弟から、大は国際間の戦争まで、そこにあるのはただ「破壊」と「空しさ」だけ。利益になるものは何もない。「以和為貴（和を以って貴しと為す）」と聖徳太子は教えている。

半世紀余り平和が続いてきたが、近ごろまたまたキナ臭い雲行きが見聞される。人類を破滅する戦争は永遠にすべきでないことを、子供から孫へ、さらに子孫に語り継ぐのが我々の世代の任務である。

【執筆者の紹介】

大正八年四月十九日 福島市に生まれる

昭和七年 福島市立第五小学校卒業

昭和十年 福島市立第四小学校高等科卒業（病弱にて一カ年停学）

昭和十四年 徴兵検査 身体虚弱にて丙種合格、兵役免除となる

昭和十八年 徴用令により軍属として満州第五八一

部隊（関東軍被服廠）に就業を命ぜられ服務する

昭和二十年八月 満州における根こそぎ動員により、急造の四平街独立歩兵大隊に召集される

昭和二十年八月 終戦により武装解除 ソ連邦に抑留され、ブラゴエシチェンスクより入ソ イルクーツク第五収容所に収容され、主として建築作業の手伝いをやらされる

昭和二十三年十二月四日 英彦丸にて帰国 復員

復員後は家業の印章業を手伝っていたが、昭和二十四年四月、福島製鋼株式会社に倉庫係として入社。昭和五十一年、定年にて同社を退社。退社後は、年金とともに屋敷を有料駐車場として生計を立てる。

写真と俳句を趣味とし、特に俳句については、師より「堂閉」の号を授けられる。

平成六年には「白分史」を発行。

（福島県 尾形 金一郎）